



浦西和彦（うらにし・かずひこ）

1941年9月、大阪市生まれ。1964年3月、関西大学卒業。  
岐阜県立坂下女子高校・大垣南高校教諭、関西大学専任講師・助教授を経て、1981年4月、関西大学教授。

編著『葉山嘉樹』（1973年6月・桜楓社）、『徳永直』（1982年5月・日外アソシエーツ）。共編纂『葉山嘉樹全集』全6巻（1975年4月～76年6月・筑摩書房）、『露伴全集』拾遺上下及び付録（1979年8月、80年2、3月・岩波書店）、『大田洋子集』全4巻（1982年7月～10月・三一書房）、『COLLECTION開高健』（1982年9月・潮出版社）、『完本茶話』上中下（1983年11月～84年2月・富山房）。

現住所 〒639-02 奈良県北葛城郡上牧町桜ヶ丘1の6の10。

日本プロレタリア文学の研究

昭和六十年五月十日 初版印刷  
昭和六十年五月十五日 初版発行

定価 四八〇〇円

著者 © 浦西和彦

発行者 及川篤二

発行所 株式会社 桜楓社

101  
東京都千代田区猿楽町二一八一十三  
電話（〇三）二九五―八七七―一

ISBN 4-273-02018-1 Printed in Japan

著者との了解により検印省略

印刷 錦シナノ印刷

製本 松栄堂製本

造本には充分注意しておりますが落丁・乱丁などの折には  
小社あるいはお買い求めの書店でおとりかえします。

浦西和彦著

日本プロレタリア文学の研究

桜楓社



日本プロレタリア文学の研究

目次

I

- 黒島伝治「二銭銅貨」——貧しさゆえの悲哀—— 9
- 岩藤雪夫の「鉄」と「賃銀奴隷宣言」 17
- 徳永直『太陽のない街』と共同印刷争議 43
- 山本勝治と「十姉妹」 76
- 宮本百合子全集（河出書房版）逸文について 104
- 伊藤永之介の「梟」について 134
- 伊藤永之介の「梟」と同人誌『小説』細目 148
- 里村欣三の『第二の人生』 162

II

- 『文学新聞』（日本プロレタリア作家同盟発行）について 175
- プロ演劇におけるリーフレットをめぐるつて
- 『左翼劇場パンフレット』『タワリーシチ』『同志』『演劇新聞』——
- 『プロレタリア演劇』と『プロット』 227

III

『煤煙』論の前提 245

大田洋子の初期作品について——「流離の岸」を中心に——

271

IV

マルクス主義芸術研究会のこと 283

百合子と『日米時報』のことなど 287

藤森成吉「何が彼女をそうさせたか？」のすみ子 291

落穂拾い 295

越中谷利一年譜 304

あとがき 319



日本プロレタリア文学の研究



## 黒島伝治「二銭銅貨」

——貧しさゆえの悲哀——

### 農民文学における秀作

黒島伝治の「二銭銅貨」は、わずか「二銭やこし仕末をした」ために、その子供が生命を失うという不幸が、簡潔な筆でリアリティックに描かれている。弟の藤二が兄のもう十二、三年も前に使い古した独楽こまを探し出してきて、「お母かああ、独楽の緒をかうて」とせびった。生活に余裕のない苦しい家計である。その苦しさが身にしみついている。買ってやることになっても、兄の使い古した緒がまだ残っていないかと物置きの中を探し確かめる母親の「何事にもこせ／＼する」姿が的確に書かれている。雑貨店には、幾十条も揃えて同じ長さに緒が切ってあった。その中に一条だけ他のより「一尺（約30センチ）ばかり短い」のがあり、それを二銭安くしてもらったのである。『日本経済統計集』（昭和33年4月20日発行、日本評論新社）によると、この小説の書かれた大正十四年の精米石当たりの平均価格は五十一円六銭、一升五十一銭である。なお、その前年三月九日に小樽高等商業学校を卒業し、翌日北海道拓殖銀行に就職した小林多喜二のその時の本俸は七十円であった。短い緒を買い、二銭安くしてもらったこ

とが、母親にとっては「なんだか二銭儲けたような気がして嬉しかった」のである。しかし、その代償はなんと高かったことであろう。

藤二は六歳である。皆と一緒に独楽を回しているうちに、自分の緒が他人よりも短いのに気づく。緒が短いため負けるような気がし、藤二は牛が粉ひき臼を回しているのを番をしながら、中央の柱に緒をかけ、その両端を握って、緒よ延びよと引っぱっているうちに、牛に踏みつぶされてしまったのである。今日のように品種が改良され、トラクターなどの機械を使つての農業ではない。会社や役場に務めていて、その片手間に農業というわけにはいかぬ。牛や馬を使つての農作である。牛を飼つておれば、当然牛に食わせる草を朝早くから刈りにいかねばならないであろう。遊び盛りの六歳の子供にまで、牛の番をさせねばならないほど忙しい。人手を必要とした。一家総勢で、父も母も兄も働いている。それでいて生活はすこしも豊かにならない。「二銭銅貨」はそうした極貧の農民の生活の断面をみごとに描き出し、形象化して、農民文学の一つの秀作となっている。

### 壺井繁治との出会い

黒島伝治は明治三十一年十二月十二日に香川県小豆郡苗羽村（現在内海町）苗羽甲二千二百一番地（通称芦ノ浦）で生まれた。同じ村の出身に詩人の壺井繁治がいる。また壺井（旧姓岩井）栄は隣り村の出身である。壺井繁治は「僕も黒島とおなじ苗羽村に生れたが、部落がちがっていたので、幼い時代の彼についてはあまり知るところなく、彼を知るようになったのは、僕が分教場から本校へあがってからである。小学校時代にも、僕と彼とは特別に親しい間柄ではなく、彼の家へ遊びに行ったことなど一度もなかった」と、幼い時期における黒島伝治との関係を、『軍隊日記』（黒島伝治遺稿 昭和30年1月15日発行、理論社）の「解説」で述べている。その黒島伝治と壺井繁治とが親し

い間柄になったのは、それぞれが上京し、全く偶然に出会い、お互いが文学を志していることを知ってからである。黒島伝治は「僕の文学的経歴」(『文学風景』昭和6年1月1日発行)で、次のように述べている。

東京へ来て、半年くらい経った冬、たしか神楽坂の芸術倶楽部だったかと思う、講演をききに行つた。その時、ふと、同村の壺井繁治に出会した。そこで始めて、壺井が文学をやろうとしているのを知つた。意外だつた。文学をやる人間を国賊のように云う村から、文学がすぎな人間が二人出ていたからである。

黒島伝治が文学を志して上京したのはいつか。在来の年譜や文学事典類では大正六年の「秋頃」となっているが、これは実際のところよくわからないようだ。黒島伝治が大正六年の「秋頃」に上京し、そして「半年くらい経つた」時期、壺井繁治に邂逅したとすれば、それは大正七年の「冬」でなく、「春」ということになる。「冬」と「春」では時期的にズレがあり、黒島伝治の上京を大正六年の「秋頃」とするのには疑問が残る。

壺井繁治は黒島伝治との東京での再会について、前記の「解説」で次のように述べている。

僕が実業補習学校を途中でやめて中学へ行つたのは、江田島の海軍兵学校へはいるためだったが、眼が悪くて不合格となり、およそ軍人とは方向のちがう文学を志望して、大正六年(ロシア革命のおこつた年)、早稲田大学英文科の予科に入学した。ところが、実業補習学校で別れて以来、まったく忘れていた黒島に思いがけなくも東京でめぐりあつた。いまでもはつきりおぼえているが、それは神楽坂の芸術倶楽部においてであつた。(略)当時、早稲田文学社主催の定期文芸講座がいつもここで開かれていた。そして僕はその聴講生の一人となつていた。ある夜、中村星湖の講演(どういふ演題であつたか、いまはまったくおぼえていないが)をききおえ、廊下へでると、そこでばつたりと黒島に出会つたのだ。それがあまり偶然な出会いなので、はじめはひとちがいではないかと疑われたくらいだつた。

しかも僕とおなじく、彼も文学を志して東京へ出てきているということを知つて、僕の驚ろきは倍加した。そしてその倍加した驚ろきは、二人を急速に親い間柄にむすびつけた。

壺井繁治の方がやや詳しく当時のことを回想している。『早稲田文学』巻末に芸術倶楽部で開かれた早稲田文学社講演会予告が出ている。中村星湖が講演した大正七年における早稲田文学社講演会は、三月十五日（講師谷崎精二、稲毛詛風、西宮藤朝、中村星湖）と、四月十九日（講師島村抱月、中村星湖、本間久雄）と、六月十四日（講師田中王堂、中村星湖、秋田雨雀）の三回である。大正七年九月から十二月にかけては早稲田文学社講演会が開催されていない。黒島伝治の記憶では「東京へ来て、半年くらい経つた冬」に壺井繁治と出会つたということであるから、それは大正七年ではないようだ。

大正六年十月十九日に早稲田文学社講演会が開かれ、その時の講師は、楠山正雄、森口多里、中村星湖の三人である。いろいろ勘案し、推定してみると、黒島伝治が文学を志望して上京したのは大正六年四・五月頃で、壺井繁治に偶然出会つたのは大正六年十月十九日ではないかと思われる。黒島伝治がどういうすじみちで文学につながつていったかはつきりしないところがあり、壺井繁治と出会う以前の投書時代のことも含めてもっと調査を進めねばならないであろう。

黒島伝治と壺井繁治とが東京でいつ出会つたかというようなことは些細なことである。しかし、黒島伝治の文学的修業や文壇に登場する過程をながめる時、壺井繁治との再会は無視できないであろう。黒島伝治は、その後、壺井繁治の発案で替え玉試験に成功し、早稲田大学高等予科英文学科へ第二種生として入学したが、徴兵猶子が認められず、大正八年十二月一日姫路歩兵第十連隊に入営し、衛生兵となった。除隊まであと二百十余日というところでシベリアに派遣され、そのシベリアで肺を病んで内地に送還される。兵役免除になつた黒島伝治は「電報」や

「窃む女」等教編の短編を携えて、大正十四年初夏に再度上京し、世田谷太子堂の壺井繁治・栄の家に寄宿した。黒島伝治が入営中につけた『軍隊日記』には「壺井兄に」として、「シベリアへ行く、生きて帰れるか、帰れないか分らぬ、死んだならば、必ずこの日記を世の中に出してくれ」と書き記している。黒島伝治が文学への志望を断念することなく持続することができたのも、壺井繁治とのつきあひがあったからであろう。再度上京した黒島伝治は、壺井繁治の紹介で、「電報」を『潮流』大正十四年七月号に発表し、作家生活に入っていく。

### 『二銭銅貨』の改題とモデル

黒島伝治の「二銭銅貨」は、「電報」と同じように壺井繁治の紹介で、『文芸戦線』大正十五年一月号に発表された。その時の題名は「二銭銅貨」でなく、「銅貨二銭」であった。現在流布している「二銭銅貨」に改題されたのは、第一創作集『隊群』（文壇新人叢書8、昭和2年10月16日発行、春陽堂）に収録された際である。題名だけでなく、本文も少し修正されている。例えば最初のところ「両手の平の間」を「左右の掌の間」といったふうに改められている。改題したのも、藤二の母親が、他のよりは一尺ばかり短い独楽の緒を買い、十銭渡して釣銭をもらうところを、「十銭渡して一銭銅貨二ツ、釣銭に貰った」と初出にあったところを、「十銭渡して二銭銅貨を一ツ、釣銭に貰った」と訂正したことが原因であろう。この「二銭銅貨」の改題について、稲垣達郎は「黒島伝治の輪郭」（『日本文学』昭和29年9月号）で、「抽象的な貨幣価値の軽少度を銅貨というところに力点をおいて感じたのを、銅貨の感をもふくめたうえ、一個ということで、軽少度をいっそう深く具象しようとしたものとおもわれる。もとの方が言葉のひびきは強いが、改題にも意味がある」と注記している。

「二銭銅貨」で興味深いことは、モデルがあったということである。我居士郎は「黒島伝治年譜」（『黒島伝治全集

第三卷』昭和45年8月30日発行、筑摩書房）の大正十三年の項目に、次のように略記している。

十一月十三日、苗羽村の馬木という部落で粉ひぎの手伝いをしていた少年が、牛に踏みつぶされて死亡した。

これがのちに「銅貨二銭」のモデルとなった。

小豆島で起こったこの不幸な事件は地元の新聞にさえ報道されなかった。戎居士郎の調べによると、「二銭銅貨」と同じように、少年が短い独楽の緒を柱にかけ引っぱりながら、鞍をかけた牛が粉ひぎ白をまわして、柱の周囲をくるくる回っていたのを番をしていて事故死したのであるという。「二銭銅貨」では藤二が六歳に設定されているが、実際に事故死した少年は小学校五年生であった。黒島伝治はこの事故の翌年、すなわち、大正十四年九月に「二銭銅貨」を執筆した。「二銭銅貨」は「独楽が流行っている時分だった」という書き出しで始まっている。すでに過去の出来事であったということが読者に明示されている。この冒頭の一行は、小説の最後の結びの部分「それから三年たつた」「母は藤二のことを思い出すたびに……いまだに涙を流す」というところと対応している。三年もの前の過ぎ去った出来事であるが、母親の悲しみは現在なお依然として続いているのである。小説における作為は、一年前実際に起こった事件を「三年」前のこととしている点にあるようだ。

#### 初期時評と「二銭銅貨」評

黒島伝治の作品を最初に取り上げて批評したのは江馬修の「最近読んだもの―葉山君の『淫売婦』その他―」（『読売新聞』大正14年11月11日）であろう。黒島伝治の最初の反戦小説で、後に「隔離室」と改題された「結核病室」について、江馬修は次のように評している。

「潮流」といふ小さな同人雑誌で黒島伝治君の「結核病室」といふ短篇をよんだ。これも佳い作だと思つた。

落ちついた、渋い、地味な書きやうで、一見穩見着実な作風である。しかし読み終つて何かしらしつこく胸にこびりついて放れないやうなものが残る。そしてちつと考へさせられる。見かけの落つきと静かさに似合はない、心の底からじり／＼と悲しみと憤りとの堪まらない気持をこみあげさせる様な作品だ。

「落ちついた、渋い、地味」という黒島伝治に対する評は、その文学的出発当時から受けていたようだ。「二銭銅貨」については、発表当時、誰も文芸時評などで言及しなかった。「二銭銅貨」の出た同じ号に葉山嘉樹の「セメント樽の中の手紙」が掲載されていて、その方の反響がセンセーショナルだったため、「二銭銅貨」が世評にのぼらなかったのかもしれない。

正宗白鳥は「文芸時評」(『読売新聞』昭和2年12月5日)で、黒島伝治の「二銭銅貨」等の八短篇を収録した第一創作集『豚群』(前出)を批評している。直接「二銭銅貨」については触れていないが、「この作者は理窟を弄せず感傷語を発せず素朴な筆で平明にある事象を書いてゐる」と指摘し、とりわけすぐれた作品として「脚を折られた男」をあげ、「しかしこのくらゐまでのところなら、私などが以前書いた田舎小説とさう違いはないやうに思はれる」と述べている。

黒島伝治がプロレタリア文学において、葉山嘉樹や小林多喜二、あるいは徳永直のように際立った派手さがなく、農民文学および反戦文学の独特な作家としての着実な仕事をしながら、一見したところではくすんだような存在であったのは、特に黒島伝治の初期の作品が、自然主義的な手法で、「渋い、地味」な、「穩見着実」な作風であり、それなりにこじんまりとまとまりを見せているが、表現や技巧における斬新さに欠けていたことと、黒島伝治の性格や人柄などとも関連していたのであろう。

黒島伝治の人柄や性格を示す一つの挿話がある。昭和七年三月末から文化団体に大弾圧が加えられ、日本プロレ